

イスラム国家における

改革とは何ぞい



インタビュー

イラン・イスラム革命から二年、宗教者の立場で革命を指導し、現在ハタミ大統領の腹心として言論・報道の自由を推進した改革派の旗手が語る、イスラム国家体制における改革の主張。

アタオラ・モハジエラニ氏に聞く

(イラン・イスラム共和国 前文化・イスラム指導大臣)

聞き手・橋爪大三郎

イラン・イスラム革命から対イラク戦争へ

イランも日本も、欧米世界の圧力のもと、近代化をスタートさせ、双方共に植民地となることを免れ、独立を保ち、近代化の過程で、君主制と宗教が大きな役割を果たした。相違点は、日本が天皇制(君主制と宗教を一体化した体制)によって近代化を進め、アメリカに敗北したあと、戦後は君主制も宗教もあまり意味を持たない、世俗的な経済大国となったのに対して、イランはイラン・イスラム革命において近代化を進めていた

世俗の君主制を、宗教的権威のもとに結集していた民衆が打倒し、いまは宗教的な体制のもとで近代化を進めている点です。この意味でイランと日本は対極的ですが、両国がよく理解しあえば、互いの経験がプラスとなるに違いありません。さて、イラン・イスラム革命はどのような出来事だったのか、革命のユニークな性格について、ご説明ください。

モハジエラニ イランには、ヴィットフォーゲルのいう「東洋的専制政治」の歴史があります。それは、専制的な王政に対する反抗の歴史でもあります。反王政運動は、中心となるリーダーや、人び

岩波書店

2001.2.1

p182-187

第684号

182 『世界』2001年2月号

解説

アタオラ・モハジエラニ 一九五四年生まれ。一九七七年イスファハン大学歴史学部卒業。シラーズ大学大学院・歴史文化専攻を経て、タルビヤト・モダッレス大学で歴史学の博士号を取得。現在、同大学教授。前イラン・イスラム共和国文化・イスラム指導大臣。『エツテラーアート』紙にコラムを執筆し、思想家・作家として多くの著書を出版している。

高校教師のかたわら、マルクス主義の研究會に参加し、神学校に通い、一九七九年のイラン・イスラム革命に参加。革命を指導した宗教界の有力者の一人、翌年の総選挙で、二六歳の若さで当選を果たす。国会議員となった氏は、アメリカ大使館占拠事件解決への明快な提案と活動ぶりがかわれ、外交対策議員連盟の副会長に。その後、在パキスタン・イラン大使館の文化部長を経て、八五―八九年、第二次ムーサビイ内閣の政務担当副首相、以後、九七年まで、ラフサンジャニ政権の法律・国会担当副大統領として活躍。

ホメイニ師死去翌年の一九九〇年、イラン・イラク戦争が終結し、「アメリカとの直接対話」をはじめ提唱。政治生命を失いかねない勇気ある提言が、その後イラン政治の変動のきっかけを作った。その五年後、保守派に反撥したラフサンジャニ政権の大臣や副大統領ら一六人が「建設の奉仕者」党を旗揚げしたときも、氏は、経済再建や外交関係修復をうたった結党の趣意書を起草するなど、大きな役割を果たした。九七年、改革派のハタミ大統領が国民の圧倒的支持を受けて、文化・イスラム指導大臣に任命され、政府スポークスマンにも任命された。イスラム革命以後、指導省の役割は、言論・出版・映画・音楽・芸術などを、イスラム的価値観にもとづいて検閲し、許可することだった。一九八九年、『悪魔の詩』がムハンマドを冒瀆するものとして、著者のサルマン・ラシュディ氏にホメイニ師が死刑を宣告すると、指導省は版元のバイキング・ペンギン社と姉妹関係にある代理店のすべての本を出版禁止にした。これに対しモハジエラニ大臣は、改革を推し進め、禁止されていたポ

とを組織する理念、知識人の参加、民衆の支持がえられなければ、なかなか成功しません。一九〇五―一一年の立憲革命(Enghelab-e Mashruteh)もそうでした。ところがイラン・イスラム革命の場合には、ホメイニ師のリーダーシップ、革命の理念、知識人や民衆の協力と、この四つの条件が揃ったのです。フレッド・ハリデー氏が、著書『イランの開発と独裁 (Iran: Dictatorship and Development)』で、革命がこれほど民衆に支持されたのは、毛沢東の中国革命に匹敵するのべているほどです。ホメイニ師は、マルジャエ・タグリド(シーア派の最高指導者)であったため、国民は彼の言葉を全面的に受け入れやすかったのです。彼は、宗教的な理念を押し立てて王政に反対しました。彼を支持した知識人たちも、宗教的傾向を強くもっていました。民衆は、宗教的義務を果たすかのように革命に参加しました。こうして革命の結果、おのずから宗教政権が樹立されることになりました。これに対して、ケマル・アタチュルクのトルコ革命は、ツプス・フェスティバルを許可し、発禁だった女性解放家フルグ・ファッロフザード氏の詩集に認可を与え、国営だった映画産業に外資の導入を許可し、個人展覧会の検閲を一切行わないこととした。九七年からは「新聞ブーム」とよばれるほど新聞の創刊が相ついだ。昨年の世論調査では、国民の過半数が指導省の新路線を支持している。

この指導省の寛容な対応に、保守派が反撥し、九九年、指導大臣の不信任決議を国会に提出。大臣は巧みな弁論で罷免を免れるが、保守派は報道法改正案を提出して、新聞・出版の規制強化をはかった。これが同年七月、テヘラン大学の学生デモのひきがねとなり、暴動事件に発展、死者七人、行方不明六〇人、逮捕者一千人以上を出した(学生側発表)。

かかる保守派の突き上げで、同氏は二月に大統領から辞意を認められ、その後「文明の対話国際センター」長に任命された。自由化路線のブレインとして評価される氏の動静が注目される。

(アレズ・ファクレジャハニ記)

軍人が主導したもので、その結果は世俗の政権が成立しました。日本の明治維新も、トルコ革命と似ているのではないかと思います。

——革命が成功したあと、イランはすぐ、イラクとの厳しい戦争を八年の間、戦うことになりました。この戦争は、イランの人びとにとって、どのような体験でしたか？

モハジェラニ 戦争は、多元連立方程式のように複雑なもので、プラスだけでも、マイナスだけでも割り切ることができない。まずプラス面ですが、革命の後、イランでは政権の確立、国民の形成が急務でした。戦争が、国民の形成を促進しました。戦場に赴いた人びとは、国家を明確に意識しました。イラン全土から戦場に馳せ参じた人びと、特に若い世代や革命世代の人びとは、民族の違いを超え、イラン国民として互いの理解を深めたのです。また、人びとと政府・政権との結びつきも強まりました。政府を信頼せずに、戦場で戦うことはできないのです。革命以前、パーレビ国王のための軍隊であったイラン国軍も、戦争を通じて

て、革命の軍隊へと脱皮をとげました。革命後に外国が戦争を仕掛けるのは、めずらしいことではありません。ロシア革命後にも干渉戦争がありました。近隣諸国は、革命後の混乱につけこんで、侵攻すればなにか利益がえられそうだと思うのです。

つきにマイナス面ですが、革命の後に、さまざまな分野で開発を進める必要があったのに、戦争のため開発どころでなく、生き残りを優先するほかありませんでした。農業や工業など、イラン経済は大打撃を受け、国境沿いのイラク占領地域やミサイル攻撃を受けた都市はことに深刻な被害を受けました。戦後一年が経ったのに、復興はまだ軌道に乗っていません。もうひとつの問題は、近隣諸国がイラクを支援して、イランとの関係が悪化したことです。サウジアラビア、エジプト、クウェート、アラブ首長国連邦などがそうです。フランスはミラージュ、イギリスはトルネード戦闘機を、代金後払いでイラクに輸出しました。アメリカ空軍は、ペルシャ湾のイランの石油

積み出し施設を空爆し、イラクを支援しました。また、イラン軍の動きを偵察衛星で監視し、その情報をイラクに流しました。ドイツは、イラクが化学兵器を製造する手助けをしました。その後徐々にこれらの国々と国交を正常化しましたが、われわれは歴史を忘れることはできません。また、大勢のイランの若者が戦死したり捕虜となったりしたのは大きな損失です。もちろん、イラクの若者の犠牲も、大きな損失でした。

要するに、イラン・イラク戦争は、プラスよりもマイナスのほうがずっと大きかったのです。

イラクがクウェートを占領していた当時、イラクのサードン・ハマディ副大統領をイランに迎えたことがありました。私は彼に言いました、「あなたがたは、戦略はまるでだめだが、戦術の天才ですね。賢い国なら、革命直後の国を攻めたりしませんよ。どうしても攻めなければ、あのとクウェートを攻めていけばよかったのに」。なぜかというところではイランは革命直後で、イラクどころでは

なく、パキスタンもジア・ウル・ハクがクーデターを起こしたばかりで、内政にかまけていた。トルコでは、ケナン・エヴレン政権はまだ安定していなくて、国内に目が向いていた。ソ連では、イラクと関係のよいブレジネフ政権がまだ安泰だった。世界はまだ冷戦下だった。そんなときに、イラクはイランに攻撃を仕掛けたのです。そして一〇年後、こんどは世界が一極化し、アメリカが中東で優勢となったあとでクウェートに侵攻したわけです。

イスラム国家体制の中の改革

——そのようにイラン・イラク戦争を戦いながら、イランは革命を継続し、イラン・イスラム共和国の国家体制を確立していきまね。そのイスラム国家体制が日本人にはわかりにくいのですが、イランの国家体制のうち、どの部分がよその国にも共通する、近代的な制度なのでしょう。そして、どの部分がイランに独特の制度なのでしょう。

モハジェラニ イラン・イスラム革命が勝利した結果、獲得されたイランの憲法では、一一〇条の規定により、宗教指

導者が国政を指導する権限を持ちます。ところが、実際のところイランには、この憲法をどう理解するかという、統一の解釈がないのです。大別して、二つの意見があります。ひとつは、まったくの宗教国家を志向するもので、宗教指導者(Valiye-Fagih)は憲法以上の権力をもつべきだという意見。もうひとつは、宗教国家の要素をなるべく少なく見積もろうという意見。私は、この中間、すなわち宗教国家を憲法の枠内にとどめようという考え方が、妥当な見解なのではないかと思えます。

——そのような国家体制のもと、イランの経済・社会発展の歩みは順調でしょうか？

モハジェラニ この質問は、できれば駐日イラン大使のアリ・マジエディ氏に代わって答えてもらいたいですね。彼は、経済の専門家ですから。

マジエディ 経済開発をどう進めるか、統一的な見解がまとまっていないのがイランの問題点です。もちろん、大枠は憲法に定められています。それは革命当時の情勢を反映したものです。革命

から二〇年経っても、まだ達成できない目標もあります。世界経済はこの間めざましく進展しており、その変化のスピードに対応できていない面もあります。

イランは、収入のほとんどを石油に依存しており、その石油生産を国がコントロールしています。経済を民営化し、資本主義的なものとするには、大きな溝を乗り越えなければなりません。革命後、経済には大きく二つの問題がありました。ひとつは、輸出の増大と輸入代替のどちらを主眼にするのかという問題。この議論は、イランでは決着していません。もうひとつは、国家の役割をどう考えるかという問題。革命後の一〇年間は、戦争もあったので、国民の生活を安定させるため国家主導の経済が不可欠でしたが、今後、国家の役割をどう変えるべきか、まだ方向がみえません。さらに、石油価格が変動すると、イラン経済が大きな影響を受けてしまうという問題もあります。

一致していることは、経済発展のため、外国資本と技術が必要で、国際経済

に参入するために、インフラ整備を進めるべきだという点です。石油産業以外の分野でも基盤づくりを進めないと、国際経済に参入できません。イラン経済は、国家が主導する資本主義経済なので、効率が悪く、国家の役割が大きすぎます。この問題の解決には、まだだいぶ時間がかかります。

——革命後すぐに、バーケル・サドルの『無利子銀行論』が出版されたので、私も翻訳で読んでみましたが、理解できませんでした。イランはイスラム流の経済を目指したわけですが、それはどういうものなのでしょう？

モハジェラニ イランの銀行にも利子がありますよ。とびきり高い利子がね。でも、これも考えられる。イスラム経済法が作られた時代、貨幣は金か銀だったから、その価値は保たれていた。いまは、イランのインフレが年率二〇%としましょう。銀行の五年定期の利子は一八%にすぎない。これでは定期預金は目減りし、利子を払っていることにはなりません。そう考えると、矛盾は解決するのではないかな。もちろんイスラム法学で

も、貨幣価値を議論しています。イスラム式の銀行運営も考えています。

そもそも、経済のすべての問題に宗教が解答を用意していると期待するのは正しくないのです。そんな期待をもつから、矛盾がうまれる。宗教は、経済理論ではないし、経済システムでもない。銀行をどう運営するかの理論もありません。宗教は、たとえば人びとは平等であるべきだなどといった、経済運営のおおまかな方向性を示すだけです。あとは、私たち人間が論理的に考え、解決策をみつければよい。

論理と哲学の関係をはつきり理解すべきでしょう。論理 (Logic) とは考える道具、哲学 (philosophy) とは考える材料です。イスラム教の理解では、オスール (Osul) とフェグ (Fegh) がありまして、オスールは知るための方法、フェグは知る主題です。そのオスールでは、シャルフ (Sharh = 宗教論理)、シャリール (Shariat = 宗教哲学)、アグル (Aghl = 知恵) が一体でなければならぬ。

——最近のイランの情勢を見ますと、改革

派の活動が目立ちます。いったい改革派には、どのようなグループがどれくらいあって、何を改革しようとしているのでしょうか？

モハジェラニ イランでは、政党政治の歴史が浅いので、なかなか理解しにくいのも当然です。各政党は、きちんとした政策綱領を掲げるにいたっておらず、どういふ政策を進めようとしているのか見えません。だから、改革をめぐっても、さまざまな意見の違いや争いがうまれることになりました。

ただ、様々な改革グループに共通する特徴をとりだして、改革派 (Reformists) とは何かを語ることはできます。まず第一に、政権に国民が参加し、国民の意見を取り入れることに賛成であること。改革派は、国民の権利を考え、国民がなにを望んでいるかをまず考えます。それに対して、非改革派は、国民の義務を考え、国民がなにをすべきかと考えるので、第二に、改革派は、報道の自由、出版の自由、言論の自由などの自由を支持します。非改革派は、言論の制限を支持します。言論の自由を認めると、宗教や

道徳的価値観が危機にさらされるといいます。第三に、改革派は社会に多様性を求めます。非改革派は、自分たちの言葉は神の言葉であり、多様性など無意味であり、誰もが神の言葉をそのまま受け入れるべきだと言います。第四に、改革派は、外交をおし進め、多くの国々と国交を結ぶことを望んでいます。非改革派は、イランが外国でどう評価されているか、あまり気にしません。第五に、改革派はイランをひとつの国とみていて、その歴史的、文化的、文明的な背景にも注意しています。イランに住んでいれば、イスラム教徒も、キリスト教徒も、ゾロアスター教徒も、みなイラン人だと考えます。非改革派は、イラン国民を、二つの階層 (第一住民と第二住民) に分けるのです。私は大臣として、アゼルバイジャン州にあるキリスト教の二つの教会に、修復工事の予算をつけました。ヨルファ市の近くの聖ステファノス教会と、チャルドラン市の近くのタデオス教会です。すると、イランの「文化・イスラム指導大臣」がどうしてキリスト教の教会

修復に予算を出すのか、との批判を受けました。教会への敬意が、モスクへの敬意より少なくてよいわけではない、と私は答えました。私は大臣として、歴史遺産としての教会の破損を防ぐべきだし、モスクも守らなければなりません。キリスト教徒であるイラン人の権利が、イスラム教徒のイラン人の権利より少ないとも思わないのです。

しかし、改革にも障害があります。社会的な運動であった改革が、権力を握ったときに問題です。権力を握ったかつての改革派は、必ずしもそのあともなお改革に興味をもち続けるとは限らないのです。ギリシャの軍事政権をうみだしたギリシャ革命に参加した、有名な音楽家テオドール・ミラキスは、戦いのさなかに日記を残しています。その日記に出てくる話ですが、彼には、考えの近い親しい戦友がいて、その戦友が大きな任務を任せられました。そうすると戦友は、彼と一緒にに食事をしたりすると自分の立場が危うくなるのではないかと、彼を避けるようになったというのです。そのように、

権力にはつねに、道理を通らなくしてしまふ怖さがあるのです。

——大臣はどうして、権力を握っておられてもなお改革派なのですか？

モハジェラニ 私が権力を悪用していると考えている人もいますよ。でも私のモットーは、「仕事よりも思想」なのです。仕事をしていて、それが思想と一致しないことがあれば、そのときは断じて思想のほうをどうと決めていきます。そこで、私の主たる仕事は、大学です。タルビヤト・モダッレス大学で、教鞭をとっています。この大学は、修士課程、博士課程だけの大学院大学です。大学には研究室もあるし、毎学期、一コマか二コマの講義を担当しています。それに比べてあまり重要でない第二の仕事が、「文化・イスラム指導大臣」をやることなのだ、いつも言っているんですよ！

(はしづめ・だいさぶろう 東京工業大学大学院社会理工学研究科教授・社会学)

通訳・翻訳 アレズ・ファクレジャハニ (東京工業大学大学院修士課程)